

オンラインとリアルな新しい関係 (1)

特別講演

情報技術は高等教育を
どう変えるのか？

ポスト・コロナの大学運営を考える
山本 秀樹氏 (AMS合同会社)

ミネルバ大学は
コロナになる前の
二〇一四年に開校
して、オンラインと
オフラインの授業を
行って来れています。



●私は2015年から3年間日本での認知活動を担当しました。

そもそも、なぜそのような教育形態の大学となったのかを紹介いたします。

「高等教育を再創造したい」という大きな目的があり、それを広めるにしても実績が必要とのことで大学として発足しました。

ミネルバ大学は現在の一般の大学が持つ4つの問題点の解決策を示しています。

- ・実社会と合わない専門知識より、学生が進みたい専門領域を学ぶ。
- ・効果の高い教授法を採用する。
- ・不足する国際経験を世界7カ国での異文化没入経験で養う。
- ・入学金が負担にならず、才能と努力を評価して入学を認める入試制度。



●世界中の学生に負担の少ない形で、学生の望む教育を目指します。

●授業は全てオンラインです。

ミネルバ大学での授業は

・担当教員は週一回集まって授業内容を設計をする。

・学生は事前課題で評価されない授業に参加できない。

・教員は授業後学生に個別の助言を送付する。

・学生の習熟度を分析して、週回の授業設計を調整する。

という「設計〜フィードバック」が行われおり、高度な教授法が実現しています。



授業はオンラインなのでオフラインの部分として、学生は世界中の大都市で半年間ずつ滞ります。

「都市の中にキャンパスを創るのではなく、都市をキャンパスとして活かす」という発想です。

学生は生活のために見知らぬ都市に順応しなければなりません。大変そうに思われますが、学生達は精力的に地域のイベントに参加しています。



●世界7つの都市で生活しながら、勉強をします。

入試は全てオンラインで、学校の成績、課題、面接などで決定され、合否ラインの学生には個別のフォローがあります。

ミネルバの授業を他の大学で応用する場合、従来の仕組みを変えずに情報技術だけ取り入れても効果は期待できません。大切なのは、先に明確な「ありたい姿」を決めて、それを目標にすることです。



●「教育」を超え「学育」を始めましょう！

特別講演

パーパス実現に向けた働き方
- Work Life Shiftは進化するか -

阿部野 晋氏 (富士通株式会社)

Employee Success本部というところに所属しておりまして、ニューノーマルにおける働く環境の大きな変化に対する、働き方の仕組みの改革を紹介いたします。

以前から在宅テレワークの導入などには取り組んでいましたが、コロナにより劇的に働き方を変えざるを得ない状況となりました。



Our Purpose
わたしたちのパーパスは、イノベーションによって社会に信頼をもたらし、世界をより持続可能にしていけることです。

「Our Purpose」を改革の根幹として掲げ、富士通全社のROXを進める「フジトラ」プロジェクトを一例に、社内での働き方の改革に取り組みんでいます。社内がグローバル化する中で、いたるところでイノベーションを創出する企業を目指しています。



●多様な人材の能力を集結させてPurposeを実現させます。

●コロナ禍が落ちつかない状況での働き方の改革を模索しています。

Work Life Shift 1.0として3つのベースがあります。

・ Smart Working
快適に働くための場所、時間の制約解消

・ Borderless Office
オフィスのあり方の見直し

・ Culture Change
社内カルチャーの改革

取り組みとしてハブオフィスの設置や、新しいコミュニケーション方法の模索などを行っています。



●ハブオフィスを活用したコミュニケーション

具体的な改善要望のキーワードの見える化

現場の強い要望を数値化

●社員の声を反映



●上司と部下の1on1 meetingによる情報の共有

変革の一年を振り返って、フレックス勤務制度の利用、テレワーク率の上昇により、子育てに参加出来る時間が増えたとか、睡眠時間が増えたというような変化がデータとして確認できました。



●1日の時間を有効に活用

次は、この働き易さの追求が、本当にビジネスやお客様のためになっていくかを検証しながら、更なる進化を目指します。アフターコロナを見据えてWork Life Shift 2.0を展開する予定です。



Work Life Shift 2.0 へ！

オンラインとリアルの新しい関係 (2)

特別講演

時代と共に進化し続ける
シヤチハタブランドをデジタルでも
「自己否定の精神を受け継ぐ」

斉藤 可菜子氏 (シヤチハタ株式会社)

印鑑会社としてイメージの強いシヤチハタが、なぜデジタル市場に乗り出したのかを紹介いたします。

シヤチハタ社員にはシヤチハタ文化として受け継がれている言葉に「自己否定の精神」があります。

シヤチハタの歴史は、創業であり研究熱心な舟橋が「乾かないスタンプ台」を開発し、会社を起したところから始まります。

鮫のシンボルマークには「名古屋から日本一のスタンプ台メーカーに成るぞ」という熱い思いが込められていました。

高度成長期にはスタンプ台を超える効率化が求められ、「ほんばん捺せる」スタンプ台の要らないXスタンパーを開発しました。

このXスタンパーは「シヤチハタネーム」という商品名で、ハンコの需要の高い銀行で使われるようになってから、販売が拡大していききました。

自己否定の精神

●「自己否定の精神」はネガティブな意味ではありません。

●創業者が、薬問屋に勤めており薬袋のスタンプ押しの効率化を考えました。

●1970年の大阪万博の来場記念スタンプをXスタンパーで作製、一気に全国に広がりました。

Xスタンパーの開発は、主力製品であるスタンプ台を否定するところから始まっています。これは「自己否定の精神」に加え、「日本伝統の印章文化を守りながらも、時代に則した製品を作る」という常識にとらわれない発想があったからです。

新発想

古い実績

●既存の物にとらわれません。

一九九五年には、初のソフトウェア「パソコン決裁」を開発しました。書類の決裁のために、わざわざ紙で出力し、捺印する手間を省くことができます。しかし、ネットワーク環境が整わない時代には、世の中に浸透しませんでした。

●上司と部下の承認もパソコン上で済ませることがありますが…

それが携帯端末の普及によりいつでも、どこでも、どんなクラウドからでもアクセスが可能となり、その環境を利用した承認サービス「シヤチハタクラウド」をリリースしました。

●クラウドから承認できます。

その後もデジタルの活用は広範囲に広がり、二〇二〇年からのコロナ禍では、電子決裁の必要性が、より高まりました。

ただ、この流れの中で「脱ハンコ」が持ち上がりました。シヤチハタはこの風潮の中で、「業務改善」を提案しています。出来るだけ現状のフローをそのまま、すぐに便利に使えるサービスを展開しています。

●「ハンコ文化」を無くすより「電子印鑑」への移行がオススメです。 ●これは参りました!

パネリスト

「大学における「取り残されそうな問題」への取り組み(抜粋)」

コーディネーター
パネリスト
山本 敬也氏 (名古屋大学)
山本 秀樹氏 (合同会社)
鈴木 久雄氏 (岡山大学)
立川 智章氏 (東京理科大学)

山本 ここ二年間コロナによって大学も影響を受けていますが、大学の「取り残されそうな問題」って何になりそうでしょうか。

山本 オンライン授業でのデジタル化の問題点は、技術が進めば解決されるでしょう。問題なのは変化についていけない学生と教師のメンタルを、どうサポートしていくかだと思います。

山本 デジタルの世界は気が付きが難しいので、自分で発信しないと難しいですね。

鈴木 コロナ禍で学生の身体的な活動量が30%程度減少しています。それに伴って、心理面ではストレスを抱えている感じがします。

オンライン授業で、真面目な先生がみんな、学生に「頑張れ」と対応すると、学生の勉強量が増えています。大学ではサポート体制を取っているようでも、実際にはサポートできていないと感じています。全体をコントロールする機能が必要だと思います。

立川 情報の授業で「パソコンを分解しましょう」という実験がコロナ禍でできなくて、先生がパソコンを分解した説明動画をみせました。学生は「分かった気」にはなりますが、本当の経験では無いですね。学年が上がるほどオンライン授業を要望する傾向がありますが、大学側は「オンラインの体験が本当の体験では無いかもしれない」ということを真剣に認識しないとならないと思っています。

山本 オンラインの体験学習について、ミネルバ大学では何か工夫はあるのでしょうか。

山本 基本的にミネルバでの授業は「みんなと同じことをする」ということではなく、「自分のやっていることから概念を学ぶ」という方針です。理科の実験とかも、授業で内容を学習したら、身の回りで個々に似たような実験をしてみ、「僕は、ここが分かります」という疑問を授業の中で解決していきます。

ただ、教職員が個々の学生の学習状況や思考の習慣を把握できる学習管理システムがあるミネルバ大学とは異なり、普通の大学で個別の先生が個別の学生に対応するのは相当難しいのでは、と思います。

山本 そういう話を伺うと、今の大学は色々教え過ぎてるんじゃないかと思ってしまう。もうちょっと自由度があつていいんじゃないかと思えますし、そのへんを上手くコーディネートしていかないと、次がないんじゃないかと感じます。



立川先生



山本氏



鈴木先生



山本先生

*講演では、もっと多くのことに関して議論されました。